わくわくごんちゃんイベントラリー

～子どもと高齢者の交流を通した地域の活性化～

FLP地域・公共プログラム
新原ゼミ
A生
兒玉愛之介・佐藤恒佑・澤村彩未・塚越香都・中村文音
中山桃香・永山紗江・原田瑛莉・村越柚月

目次

1.はじめに

2.市の概要

3.現状分析

3-1 人口と高齢化

3-2高齢者向け施設の現状

3-3.事前調査後のテーマ

4.サマースクールについて

4-1 調査対象、サマースクールで訪問させていただいた施設

4-2 各訪問先のヒアリングの結果
・津山市立図書館
・加茂町図書館
・津山郷土博物館
・中央児童館
・津山子ども広場事務局
・鶴山塾
・津山市役所　高齢介護課
・ふれあいサロン
・公益社団法人津山市シルバー人材センター
・かもふれあい市
・スマイル・ちわ
・城西まちづくり協議会
・美作大学ボランティアセンター
・hitotogohan

4-3 ヒアリングにおいて印象に残った部分

4-4 ヒアリングによって考えが変化した部分

5.政策提言

5-1.概要

5-2. スタンプラリー

5-3. イベントのアレンジ

5-4. 景品・広報・場所・対象・時期

5-5. 利点

5-6. 懸念事項

6. まとめ

7. 謝辞

8. 参考文献

1. はじめに

私たち新原ゼミのテーマは、「子どもと高齢者の交流を通した地域の活性化」である。こちらのテーマを設定するために、まず津山市全体について事前調査を行った。その中で見えてきた課題である高齢化に焦点を当て、津山市に住む高齢者の現状を調査するとともに、津山市の公共交通機関や教育についての理解を深めた。本報告書は、サマースクールやそれに関連する事前調査、フィールドワークから得た知見や情報をもとに、私たちが検討した研究内容および政策提言について記したものである。

2. 市の概要

岡山県津山市
面積：506.33k㎡
総人口：95,084人（2024年12月1日）
人口密度：187.79人/k㎡

岡山県津山市は岡山県北東部に位置し、北側は中国山地、南側は中部吉備高原に接している。丘陵や台地、沖積低地で構成されており、津山市から鏡野町方面には津山盆地と呼ばれる、中国地方最大の盆地がある。津山市の市章は槍印（図1）であり、俗に「剣大」という。参勤交代に親藩松平家の威勢を示したものである。当時の街並みも健在であり、風情ある街並みが広がっている。さらに、津山城は「日本さくら名所100選」にも選出されるほど美しく、非常に人気のある観光スポットとなっている。歴史を感じさせる街並みと自然豊かさを兼ね合わせ、多くの「ほんもの」を感じながら生活できるという津山市のイメージを伝えている。（図2）

図１　津山市の市章

図２　津山市のイメージを伝えるロゴ

3. 現状分析

3-1 人口と高齢化

津山市の現状について調査を行ったところ、人口の減少が顕著に見られた。

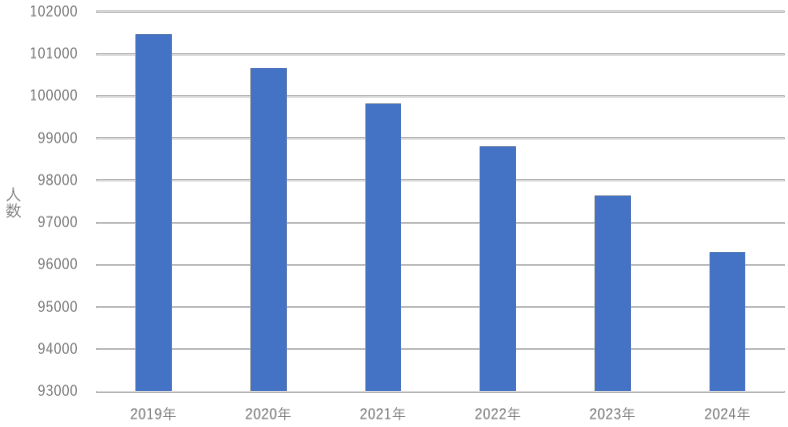
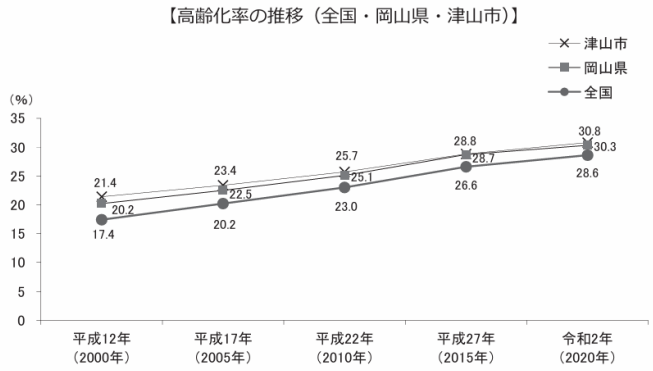


図３ 津山市の人口推移

上記のグラフは津山市統計書に記載されている住民基本台帳ベースの人口をもとにした津山市の人口推移である。このグラフを参照すると、津山市の人口は毎年継続して減少を続けており、2021年以降は10万人を下回っていることがわかる。

次に年齢別の人口についての調査を行った。そこで見えてきたのが深刻な高齢化である。第9期津山市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画に記載されているグラフと表(下記参照)によると、2000年に21.4%だった高齢化率(総人口のうち65歳以上が占める割合)は、2020年には30.8%となっており、20年間で約10%上昇している。また、岡山県全体の30.3%、全国の28.6%と比較しても高い数値を記録している。



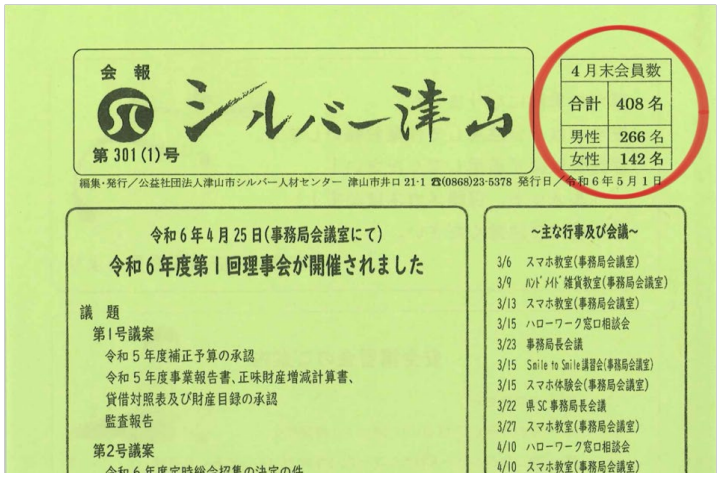
区分	平成12年（2000）	平成17年（2005）	平成22年度（2010）	平成27年（2015）	令和2年（2020）
津山市	21.4%	23.4%	25.7%	28.8%	30.8%
岡山県	20.2%	22.5%	25.1%	28.7%	30.3%
全国	17.4%	20.2%	23.0%	26.6%	28.6%

資料：国勢調査

図４ 高齢化率の推移

3-2 高齢者向け施設の現状

実際に津山市内に設置されている高齢者向けの施設としてふれあいサロン、かもふれあい市、シルバー人材センターなどがある。



会報
シルバー津山
第301(1)号

4月末会員数	
合計	408名
男性	266名
女性	142名

編集・発行／公益社団法人津山市シルバー人材センター 津山市井口21-1 ☎(0868)23-5378 発行日／令和6年5月1日

令和6年4月25日(事務局会議室にて)
令和6年度第1回理事会が開催されました

議 題
第1号議案
令和5年度補正予算の承認
令和5年度事業報告書、正味財産増減計算書、
貸借対照表及び財産目録の承認
監査報告
第2号議案

~主な行事及び会議~
3/6 スマホ教室(事務局会議室)
3/9 ﾊﾝﾄﾞﾒｲﾄﾞ雑貨教室(事務局会議室)
3/13 スマホ教室(事務局会議室)
3/15 ハローワーク窓口相談会
3/23 事務局長会議
3/15 Smile to Smile講習会(事務局会議室)
3/15 スマホ体験会(事務局会議室)
3/22 県SC事務局長会議
3/27 スマホ教室(事務局会議室)
4/10 ハローワーク窓口相談会
4/10 スマホ教室(事務局会議室)

図５ シルバー津山

シルバー人材センターが発行している会報誌「シルバー津山」第301号によると、実際にシルバー人材センターに登録している人数は408名であり、津山市の高齢者が3万人を超えていることを考慮すると少ない数値となっている。また、全世代交流を目的のひとつとしているふれあいサロンでは、その目的を達成できていない状況がうかがえた。

このことから、津山市では高齢者の居場所や高齢者と子どもが交流できる施設、イベント等が十分でないのではないかという考えに至った。

3-3. 事前調査後のテーマ

事前調査であげられた津山市の課題である高齢化と高齢者向けの施設が活用しきれていない現状、そして私たちの興味のあった子どもをかけ合わせ、子どもとの関わりを通じた高齢者の居場所作りというテーマを設定した。

4. サマースクールについて

4-1 調査対象、サマースクールで訪問させていただいた施設

津山駅中心地域と加茂周辺地域に焦点を当てて調査した。高齢者や子どもに関する施設、地域の方同士のつながりを強化する企画を行っている施設に訪問させていただいた。

4-2 各訪問先のヒアリングの結果

・津山市立図書館

この図書館は、図書の所蔵・貸出の業務や行事運営の他にも、特徴的な取り組みを行っている。それは、主に自動車文庫「ぶっくまる」の運営とボランティアの窓口である。自動車文庫「ぶっくまる」とは移動する小さな図書館であり、市内の小学校や高齢者施設、道の駅など市内36カ所を毎月定期巡回する。また、この図書館では、絵本の読み聞かせ、手遊び、布えほんの作成、ストーリーテリング、書架整理、本の修理など様々な形でボランティア活動が行われている。そうしたボランティアの窓口の役割も果たしている。具体的には、図書館が参加者をポスターの掲示や声かけなどで随時募集し、また、研修を行うことで新規でもなじめるように働きかけている。さらに、懇談会を開催することで、ボランティアから図書館への要望を聴いたり、ボランティア同士の交流の場を提供したりもしている。

この図書館では、館長へのヒアリングに加えて、施設見学もさせていただいた。これらの調査を経て次のことがわかった。図書館で運営される行事の多くは世代間交流を意図したものではない。しかし、世代間交流としては、運営側のボランティアや職員と参加者側の子どもとの交流が見られるという。この他にも、参加者の子ども同士、子どもとともに参加した親同士、

ボランティアと職員、ボランティア同士の交流も行われていたという。このことから、図書館でのイベントが、世代間交流に向いている可能性が示された。

・加茂町図書館

加茂町図書館がある加茂地域では少子高齢化が進行している。また、来館する際の交通手段が限られており、子どもは保護者と一緒でないと来館しづらい環境にある。よって、本館である津山市立図書館と比べ、来館者の高齢者率は大きく、利用者数は少なくなっている。一方で、司書の方は来館者と濃密なコミュニケーションを取りやすいため、お困りごとや、具体的なニーズを聞き取りやすいと分かった。

平日に来館機会が限られる小学生に対しては、夏休み等の長期休みに学童施設に呼びかけることで集客していると知った。図書館は学校がない間の数少ない居場所として、利用しやすい施設であると考えられる。また、加茂町図書館には小学生から高齢者に人気のイベントがあり、利用者数が増加する時期に開催している。

つまり図書館は、司書の方と利用者、また利用者同士の3世代交流を可能とした、加茂町の人々の居場所であると分かった。加えて、このような小さなコミュニティであるからこそ、防災無線をつかった広報等ができるといったことが印象的だった。

・津山郷土博物館

津山郷土博物館は、郷土としての津山市に関する文化財や歴史資料を収集・保管・研究し、その成果を広く一般に公開することを目的として設置された博物館である。この博物館では、職員へのヒアリングに加えて、館内見学及び「博物館探検」というイベントに参加させていただいた。これらの調査の結果、この博物館には2つの特徴があるように見受けられた。

一つは、地域住民に寄り添った運営を行っていることである。例えば、主に高齢者を対象に人気のある古文書講座や歴史講座を、年間を通して行っている。子ども向けには、小学生を主に対象とした夏休みの体験学習など、様々なイベントを行っている。そのイベントの一つに、博物館を探検しながら与えられた問題の答えを探す「博物館探検」がある。このイベントには特に職員の工夫が凝らされていた。問題が、年中や年長の児童でも楽しく解くことができるよう作られていた。具体的には、知識を問うような問題ではなく、歴史を習ってなくても楽しめる問題だった。さらに、大人には問題の解説が書かれた紙を渡すことで、子どもとその保護者が一緒になって楽しめるような工夫もなされていた。

もう一つの特徴は、地域の様々な組織と連携していることである。連携事業の中には、館内で受け入れて行うものもあれば、館外に出向いて行うものもある。館内では、小学校、中学校、高校、大学の全ての学生を受け入れ、社会科見学や職場体験、実習を行うことで、地域の学校と連携している。小学校や大学には出向く場合もあり、出前授業やセミナーも行っている。館外では、先述した古文書講座や歴史講座を、公民館やシルバー人材センターに出向いて行っている。また、図書館や市役所、コミュニティセンターなどにも出向き、セミナーやワークショップ等の多様なイベントを行っている。

このように、この博物館は、地域の様々な組織と連携しながら地域住民に寄り添った運営を行うことで、地域に根付いた存在となっている。この博物館の在り方から、私たちが政策を考案する際には地域に寄り添うことが重要であると再確認した。

・中央児童館

児童館内にはカードゲームや駒などの子ども達の好きなおもちゃがたくさんあり、子ども達が楽しく遊んでいる姿をみることができた。館内ではゲーム機持ち込み禁止にしていることから、一人で遊ぶのではなく、自然と他の子ども達と一緒に遊ぶことが習慣化し、それが子ども達の社会性を育むことに繋がっていると気付いた。

さらに、子どもの年代ごとに異なるイベントを企画しており、テーマだけでなく、子どもや親御さんとの関わり方も年代に応じて工夫されているというのがとても印象的だった。そのようなたゆまぬ努力により、イベント参加のリピーターを多数生んでいるのだと思った。

また、小学生を対象としたイベントでは、異なる学年間での交流も盛んに行われており、縦の繋がりもできていると分かった。特に小学生は学年によってできることが異なるため、縦のつながりを作るためには、自分と相手の違いを認め、相手のことを考えた行動が大切になる。横の繋がりだけでなく、縦の繋がりもつくる機会が与えられていることは、子ども達にとってとても貴重な経験になっていると感じた。

・津山子ども広場事務局

津山子ども広場は、「子どもの文化・芸術活動やあそびを保障すること」を軸に、子どもとおとながいっしょに「生の舞台芸術鑑賞」や「”やってみたい”を”やってみよう”に変える活動（サークル活動）」に取り組みながら、子どもとおとながいっしょに楽しみ、共に成長していく時間や空間を大切に活動している会である。ヒアリング調査においては、会員の方々の現状や、鑑賞会のようなイベントやサークル活動を行う際に大切にしていること、実際に津山市でコミュニティづくりをしておられるからこそのお話を聞くことができた。特にサークル活動として行われている「高学年ラフィ」についてのお話の際におっしゃっていた、次の世代に自分の経験を伝えることで「”教える”が階段状になって連なっていく」ことや、イベントなどの運営を異年齢間でともに行い、友達感覚で関わることの大切さが印象に残っている。

特に私たちは突発的なイベントではなく「継続」に重きを置いていたこともあり、NPO法人化してから38年間継続して活動を続けてこられた津山子ども広場様の理念は、政策提言を考える上での前提として大変参考になるものであった。

・鶴山塾

鶴山塾は学校にあまりなじめていない小・中学生の子どもを対象にした支援施設である。具体的には職員が子どもと悩み事の相談、雑談などを行い、打ち解けたら、同じ鶴山塾の子どもと遊ぶなどすることで子どもの自立支援を行っている。鶴山塾に通うことのできない子どもには、相談員が直接出向き対人関係の構築を試みる。ここで印象に残ったことは、生徒を受け入れる姿勢だ。鶴山塾は「治そうとするより、分かろうとせよ。」を教育理念にしているため、学校に通えるようになることを目標にしていない。犯罪を犯してしまったような子どもやだとしても受け入れ、苦手なことや問題にあまり触れずに長所を伸ばす支援をしている。

このように、鶴山塾はどのような子どもでも居て良いと思えるような、学校でも家でもない場所を提供することで子ども達の心の支えとなっている。

・津山市役所　高齢介護課

高齢者の単独世帯の割合は年々高くなっており、高齢者の人と関わる機会が少なくなっているという問題が深刻化していると分かった。高齢者同士の交流場所としては、主に「こけない身体」「ふらっとカフェ」「ふれあいサロン」があるが、コロナウイルスの流行により、利用者数が減少していると知った。

また、客観的なデータだけでなく、高齢介護課の職員として個人的に考えられている貴重なご意見もうかがうことができた。その中で、子どもと交流したい高齢者がどれほどいるのかという具体的なデータはないが、子どもとの交流は喜ばれる傾向にあることが分かった。また、核家族化が進んでいるため、世代間交流を促進するべきと考えているとおっしゃっていたこと

から、高齢者同士のコミュニティだけでなく、世代間交流を促進するようなコミュニティも必要だと改めて感じた。

・ふれあいサロン

ふれあいサロンは、津山市が運営する家族連れや高齢者、子ども同士などが「幅広く自由に交流を図れるコミュニティ広場」の役割をもつ施設である。今回のヒアリング調査にご協力いただいたABクラブ様は、同じマンションの住人同士でのビリヤード活動を通じて交流をする場としてこの施設を活用されている。ヒアリングを通して、他の訪問先ではあまり聞けなかった「津山市で生活をされている普通の方々」が日頃お考えになっていることやお求めになられていることを聞くことができた。これは政策提言をさせていただくうえで非常に意義のあることだと考えている。特に、ふれあいサロンを含む地域の交流活動の現状について、地域交流を目的としたグループはそれなりに充実しているということを教えていただいた。したがって、私たちは新しいコミュニティへの需要は少ないと理解し、調査前と考えが変化するきっかけとなった。

また、「もともと挨拶しかしないような仲だったのが、交流活動を通じて親密な関係に変わった」ということを伺い、私たちが提言する世代間交流推進のための政策により、津山市全体としてもそのような効果が期待できるのではないかと考えた。

・公益社団法人津山市シルバー人材センター

津山市シルバー人材センターは、高年齢者が働くことを通じて生きがいを得ると共に、地域社会の活性化に貢献する組織であり、主に草刈りや剪定などの仕事を高齢者に提供している。他にも、イベントでの子どもの見守り、児童クラブ、介護送迎などの仕事がある。また、シルバー人材センターは仕事を提供するだけでなく、高齢者のコミュニティの場としても機能している。ガーデニングやスマホ講習などの技能講習を定期的に行っており、多くの高齢者の居場所となっている。

お話を聞いて、高齢者はやはり生きがいや居場所を求めており、実際、働いたりコミュニケーションを活発に取ったりしている人は元気な傾向にある、ということが分かった。そのため、シルバー人材センターを高齢者に加え、子どもも気軽に立ち寄れる施設にしたい、とおっしゃっていたが、津山市にはふれあいサロンなど高齢者のコミュニティ施設がすでに複数あり、予算が分散してしまっていることが課題として挙げられるという。

これらのお話を受けて、高齢者と子どものためのコミュニティを新しくつくるのではなく、今すでにある施設を活用することが重要である、ということを学んだ。

・かもふれあい市

かもふれあい市は、地産地消を目的として地元の野菜を販売している団体である。会員の方々は「加茂の今後を考える会」に所属しており、加茂町の課題を考える中で、子どもとのふれあいの場をつくるためのイベント企画を行っている。印象に残ったことは主に2つある。

1つ目は、企画の内容についてである。企画を考える際に、実際に学童保育に出向いて子どもたちから意見を聞いたところ、子どもたちは自然や川を利用した遊びを求めていると分かった。実際に行った際には、会員の方が開催場所となる畑を提供し、子どもの遊び相手として大学生ボランティアに協力してもらうことで実現した。こういったイベントに子どもをたくさん呼ぶためには、親にも来てもらう必要があり、場所や内容を工夫する必要があると分かった。

2つ目は、企画の継続方法についてである。交流の場をこれからも設けて行くためには、参加者に無理に押し付けて参加してもらうのではなく、主体的に参加してもらうことが必要である

と知った。そのためには、親子世代のニーズについて十分に調査する必要がある。よって、情報収集や企画を考える期間を考慮すると、3,4か月に一度の頻度で開催するのが良いと分かった。訪問前までは、頻繁に開催することを考えていた。しかし、一つの企画までに時間を要しても、イベントに関わる全ての人のニーズを理解して提供することが、企画団体、イベント内容共に長く愛される理由になると考えた。

・スマイル・ちわ

スマイル・ちわは、高齢者の方々が地域の人々との繋がりを大切にしながら、支え合い、より良い暮らしづくりを目的として活動する団体である。ご飯を持ち寄った交流会や、草刈りボランティア、学生と協力してイベントの開催などを行っている。

話を伺った際に一番印象に残ったことは、「子どもと関わりたいと思っても、前提として周辺に住む子どもの数が少ない」とおっしゃっていたことである。イベントに参加するためには保護者の送迎が必要になる子や、イベント運営のためにスマイル・ちわの施設に前泊する高校生がいた。高齢者は交流する機会を望んでいるが、企画をしても子どもが集まらないという課題があると分かった。

また、一度関わりのあった学生との繋がりは濃く、交流後に何度も再訪問する学生がいるということを知った。つまり、交流の機会は少なくても、数日間の交流で濃い関係を築くことは可能なのである。よって、世代間交流を継続させていくためには、誰もが集まりやすい場所や、学校が交流の機会を用意するといった、関わりを持つためのきっかけを簡単に提供する必要性があると考えた。

・城西まちづくり協議会

津山市城西まちづくり協議会は城西地域の歴史と文化を尊重したまちづくりを推進し、城西地域の総合的な地域づくり団体として、地域全体の福祉向上を図ることを目的としている。ヒアリング調査に協力していただいた事務局長の佐々木さんは津山市に移住してきた方であり、40年以上津山市にお住いになり、当時の津山市の状況を変えるため、積極的に地域づくりに取り組まれてきた。城西地区の歴史から、まちづくりを行う組織の運営、三世代交流のじばこやまるごと博物館フェアなどのイベントの企画、運営についてなど様々なことを教えていただいた。2200世帯が加盟する大きな組織の運営や総会に出席する約100名をまとめ、イベントを実施する大変さを実感するとともに、イベントに多くの高齢者や親子が参加していることから、協議会の取り組みが城西地区や津山市への地元愛の形成に大きな影響を与えているのだと理解した。また、佐々木さんのおっしゃった、まちづくりにおける外の目、「よそ者」の重要性は私たちの抱えていた、サマースクールの政策提言という型に対する疑念、市外に拠点を置く我々が、市内のことに口出しするのは津山市やそこで暮らす人たちへのリスペクトに欠けるのではないかという不安を晴らし、ゼミとしての意見を形成する上でとても大きな支えとなった。

・美作大学ボランティアセンター

美作大学は、県内だけでなく、県外からも多くの学生が集まる津山市唯一の大学である。ヒアリング調査に協力していただいたボランティアセンター様は地域住民や団体との直接のつながりを持ち、学生のボランティア活動の拠点となることで、学生と地域とを繋ぐ架け橋としての役割を担っている。ヒアリング調査では学生によるイベントの企画、実施について、ボランティア活動の意義、地域から求められていることへの答え方など、地域に貢献することに強いこだわりを持つ組織だからこそわかる貴重なお話を聞かせていただいた。ただ地域住民のお手伝いをするのではなく、自分たちの活動を振り返り、活動の中で何ができたのか、何を得たの

か、やって良かったという満足感を得ることが重要であるというお話やイベント実施までの詳細な過程を聞き、県外に拠点を置く、よそ者である私たちがどのように津山市のことを「わがごと」として捉えるか、地域に寄り添った政策提言とはどのようなものか捉え直すことができた。

・hitotogohan

ヒトトゴハン株式会社は真庭市にある会社で、主な業務として廃校のリノベーション、飲食店のメニュー開発、ケータリング、料理教室があげられる。ヒトトゴハンが関わっている高齢者施設はさくら健康サロンだ。サロンは廃校になった小学校を活用して毎週水曜日に介護体操をしており、現在は住民会が運営し、ヒトトゴハンが月に2回ケータリングを行っている。お話を伺って学んだことは、地域のコミュニティにはある程度の需要があるが、高齢者の体力をよく考えて企画を行う必要があることだ。サロンとは別に料理教室を高齢者に協力してもらおうとしたときに、責任の重さや、覚える仕事の多さからあまりうまくいかなかったそうである。よって高齢者との交流を考えるときは、「軽い役割」と「軽い責任」を高齢者に与えられるようなものにする必要があると学んだ。

4-3ヒアリングにおいて印象に残った部分

高齢者に関する施設に訪問させていただいた中で特に印象に残ったことは主に３つある。１つ目は、ふれあいサロンでビリヤード活動に参加されている高齢者の方が、自分たちのグループ以外にもたくさんの地域交流のためのグループがあるため、今は会員を増やすことは考えていないとおっしゃっていたことだ。２つ目は、シルバー人材センターで、高齢者同士のコミュニティはたくさんあるが、予算が分散していることが問題だと分かったことだ。３つ目は、美作大学で、ボランティアサークルの方達が経験されてきたことを伺ったところ、東京の大学が新しいコミュニティを作るには課題がとても多いとおっしゃっていたことだ。

このことから、高齢者の方の集まるコミュニティは既に充実しているということ、コミュニティが複数あることによる予算の分散が課題であることが分かった。

また、子どもに関する施設に訪問させていただいた中で特に印象に残ったことは主に２つある。１つ目は、津山市役所の高齢介護課の職員の方に子どもと交流したい高齢者がどれくらいいるのか伺ったところ、データはないが、子どもとの交流は高齢者に喜ばれる傾向にあると分かったことだ。２つ目は、NPO法人スマイル知和さんに訪問させていただいた際、周辺に住む小中学生の人数は１０名程度と少なく、世代間交流を通じて子どもと繋がりたくても、それ以前に子どもがいないという問題があると伺ったことだ。

よって、子どもとの関わりへの需要は多いのに対し、少子化により子どもが集まりづらく、関わる機会が減ってしまっているという課題から、イベントの参加促進、双方の繋がりの強化が必要だと考えた。

4-4ヒアリングによって考えが変化した部分

先述の、ふれあいサロン利用者の声やコミュニティの充実による予算の分散の現状を知り、私たちの方向性は大きく変化した。事前調査の段階では高齢化の進行から、孤立してしまう高齢者が増え、居場所となる新たなコミュニティの創出が求められているのではないかと考えていた。しかし、ヒアリング調査を通し、津山市内には魅力的なコミュニティが充実しており、高齢者にはそれぞれの居場所が存在していると理解した。よって、津山市内の新たなコミュニティを求める声は私たちが考えていたよりも少ないのではないかという考えに至った。また、

高齢者の子どもとの関わりを求める声や、イベント実施における課題を聞き、イベントへの参加促進によって、世代間のつながりを強化することが必要ではないかと考えた。
以上の点から、私たちは世代間交流を通じた高齢者の居場所づくりを、新たなコミュニティを創出する方法ではなく、既存の施設やイベントを活かした地域活性化によって達成しようと考えた。

5.政策提言

5-1.概要

以上の考えを踏まえ、私たちから提案する政策は、「わくわくごんちゃんイベントラリー」である。かっぱは津山弁でごんごと言われている。ごんちゃんは津山市内のお祭りを盛り上げてくれており、統一されたキャラクターがいなかったので今回私達がオリジナルでごんちゃんを作成した。また、スタンプを集めることではなくイベントに参加してもらうことが目的のため、わくわくごんちゃんイベントラリーと名付けた。

「わくわくごんちゃんイベントラリー」とは、端的に言えば、「アレンジを加えた市内の既存のイベントを回るスタンプラリー」を意味する。なお、ここでのイベントとは、例えば図書館で開催されている絵本作りや読み聞かせなどを指す。

このスタンプラリーは、他のスタンプラリーのような、場所を訪れることを目的としたスタンプラリーではない。参加者がこのスタンプラリーをきっかけに普段は訪れない場所に行き、普段関わることのない、高齢者、違う学校に通う小学生、保護者たちが互いに交流し、スタンプラリーの期間が終了した後も各施設が運営するイベントで交流を深めていけるようになることを目標としている。要するに、このスタンプラリーは、イベントの参加者集めを改善するためのものである。

5-2. スタンプラリー

このスタンプラリーは津山市内のイベント開催場所、その他対象地域を巡り、そのスポットを訪問すると１P、さらにそこで行われているイベントに参加すると３Pとお菓子がもらえる、というものである。スタンプが３P貯まると商品券などが当たる抽選に１回参加することができる。

このスタンプを設置する場所としては、現在すでにイベントが活発に行われている津山市立図書館、津山郷土博物館、津山市立公民館や、多くの人が立ち寄る津山駅、津山駅周辺スーパーなどを検討している。

5-3. イベントのアレンジ

イベントについては、現在図書館で行われている絵本作り・読み聞かせや、むかしあそび体験など、子どもと高齢者が共に楽しめ、交流を促進できるものを実施する。また、現在行われているイベントの運営者には高齢者も含まれており、そこでも子どもと高齢者が関わることができると考えている。

ここでイベントの具体例を1つ取り上げる。津山市立図書館でのヒアリングを通して、津山市立図書館にてボランティアの方が作成した布絵本を展示するイベントを行っていることを知った。このボランティアの方々は高齢者が多い現状にある。そこで、この布絵本を作る段階に子どもを巻き込み、子どもと高齢者のボランティアの方が一緒に布絵本を作るイベントなどの実施を検討している。

5-4. 景品・広報・対象エリア・ターゲット層・開催期間

景品は、小学生向けに、お菓子を検討している。また、高齢者や保護者など大人向けに、スタンプラリースポットとなっているスーパーの商品券・クーポンを検討している。

広報は、防災無線とチラシで行うことを考えている。防災無線は、津山市の一部の地域で広報として既に実用されていることから、候補に入れた。また、チラシは津山市の市報「広報津山」に掲載することを視野に入れて、候補に入れた。

対象エリアは、現時点で、津山駅周辺と加茂地域を想定している。というのも、私たちがサマースクールで調査した地域だからである。しかし、ゆくゆくは津山市全域に拡大したいと考えている。

ターゲット層は、小学生と60～70代の高齢者である。

開催期間は、すでに塾や習い事等で忙しい小学生が時間を取りやすい夏休み期間であることから、7月下旬から8月までを検討している。

5-5. 利点

今回の政策提言によって、高齢者・子どもとその保護者・行政それぞれにとって利点があると考えている。まず、高齢者の方々にとっての利点は主に、各イベントでの子どもとの交流を通じて生きがいをつくることができ、それが健康の維持につながることであると考える。外出してイベントに出向くこと自体もそうだが、そこで同世代・他世代と交流をすることで新たなコミュニティに参加し、生きがいが創出されることが期待できる。

次に子どもとその保護者にとっての利点は、主に2点あると考える。1点目は、夏休み期間に市内でスタンプラリー・交流イベントを楽しめる機会ができることである。また、交流イベントを通じて子どもの社会性の発達につながること、保護者にとっても子どもがイベントに参加している間に時間ができたり、交流の場で育児に関する相談ができたりなど子育てのサポートにつながることなどの効果も期待できる。2点目は、イベント把握の容易化である。開催されているイベントをスタンプラリーという形で改めてまとめることで、その時に開催されているイベントを把握しやすくなるのではないかと考える。

最後に、行政(津山市)にとっての利点は、主に2点あると考える。1点目は、施設の利用率の増加である。スタンプラリーによって新たな利用者を呼び込むことで、交流を推進できるイベントへの参加人数が増え、それがすでに多く存在するそのようなイベントを行っている施設の利用率の増加につながることが期待できる。2点目は、交流を通じた津山市の歴史・文化の継承である。少子高齢化が進む津山市で、これら伝統を受け継ぐためにはこのような高齢者とその下の世代が交流するきっかけをつくることが必要であると考える。

5-6. 懸念事項

政策提言の懸念点は2つあげられる。1つ目は、津山市は広く保護者の送迎が必要になってしまうのではないかということだ。確かに、津山市の主な交通手段は車であり送迎は必要になってしまうので、スタンプラリーの景品を大人でも楽しめるようなものにしている。2つ目に、現状のイベントが好きな人もいるのではないかに関して、ふれあいサロンでは新しい人を募集することを考えていないという話を、鶴山塾ではイベントボランティアは人数をそれほど気にしていないと聞いた。このように現状の交流の形で満足している方々も多く見受けられたので、子ども、高齢者のみの方が良いイベントはスタンプラリーに含まない。

6. まとめ

事前調査後のテーマは、津山市の高齢化の問題と私達の子どもに関する興味から、子どもとの関わりを通した高齢者の居場所作りであった。しかし、サマースクールを通して高齢者のための施設が充実していることを知り、新しいコミュニティ作りの必要性をあまり感じなくなった。また子どもとの関わりをもとめる高齢者の声を聞き、世代間交流のためのイベント参加促進が大切だと感じた。

そこで、わくわくごんちゃんイベントラリーの開催を政策提言にし、様々な人がイベントに参加しやすくなるように試みている。高齢者だけでなく世代間の交流を深めることで、地域全体の活性化につなげていきたい。

7. 謝辞

私達の調査にご協力いただいた皆様、そしてサマースクール開催、運営などにご尽力いただいた全ての皆様に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

8. 参考文献

・「公益社団法人津山市シルバー人材センター」「シルバー人材センターとは」https://webc.sjc.ne.jp/tuyama/index（最終閲覧日：2024年12月29日）
・「公益社団法人津山市シルバー人材センター」「シルバー津山第301号」https://webc.sjc.ne.jp/tuyama/blockb_pdf/283/72245?path=42%2Fblockb_664566da4744b.pdf（最終閲覧日:2024年12月28日）
・「津山郷土博物館」「施設概要」https://www.tsu-haku.jp/untitled18.html （最終閲覧日：2024年12月31日）
・「津山市公式サイト」「第9期津山市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」https://prdurbanostymapp1.blob.core.windows.net/common-article/6722acb918175e5985a65177/%E7%AC%AC9%E6%9C%9F%E8%A8%88%E7%94%BB%E6%9B%B8%EF%BC%88%E5%85%A8%E4%BD%93%EF%BC%89.pdf （最終閲覧日:2024年12月28日）
・「津山市公式サイト」「ふれあいサロン　施設案内」（最終閲覧日:2024年12月29日）https://www.city.tsuyama.lg.jp/article?articleId=65a108cb25d97b65e2b140b9
・「津山市公式サイト」「中央児童館」（最終閲覧日：2024年12月31日）
・「津山市公式サイト」「令和5年度版津山市統計書（令和6年3月刊）」https://www.city.tsuyama.lg.jp/common/photo/free/files/5059/20240420123614014063 2.pdf（最終閲覧日:2024年12月28日）
https://www.city.tsuyama.lg.jp/article?articleId=65a1069725d97b65e2b13d13
・「津山新聞朝日新聞社」「小学生が「昔遊び」を体験　地域の高齢者から教わり楽しい時間 20年以上続く交流活動／岡山・津山市」（最終閲覧日：2024年11月20日） https://tsuyamaasahi.co.jp/%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E7%94%9F%E3%81%8C%E3%80%8C%E6%98%94%E9%81%8A%E3%81%B3%E3%80%8D%E3%82%92%E4%BD%93%E9%A8%93%E3%80%80%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E9%AB%98%E9%BD%A2%E8%80%85%E3%81%8B%E3%82%89%E6%95%99/
・令和5年度津山郷土博物館年報（令和6年7月31日発行）
・令和5年度津山市立図書館概要（発行年不詳）
・「NPO法人みる・あそぶ・そだつ津山子ども広場」https://sites.google.com/view/tsuyama-kodomohiroba/（最終閲覧日:2024年12月28日）